news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2015 **084**

川西英《古道具屋》 1941（昭和16） 木版、紙

これは
いったい、
何だろう？

みんなの「つぶやき」から生まれる「ものがたり」

なつやすみの美術館５　つぶやき　おはなし　ものがたり　　7月14日（火）— 8月30日（日）

展覧会とは、一つの「ものがたり」と言えるかもしれません。それがすでに明白な事実であったり、まだ仮説であったり、という違いはありますが、企画する側が、展示されている「物」にまつわるお話を「語る」という構図は、確かに「ものがたり」と重なります。私たち学芸員は、作品について調査・研究をし、作品にまつわるさまざまなお話を積み上げてゆきます。展覧会は、そうした研究成果の発表の場となることもあります。

一方、来館する人たちは、作品や解説を見て驚いたり、楽しくなったり、納得したり、つまらないと感じたりするでしょう。一緒に来た人と話したり、家に帰って家族に伝えたり、最近ではインターネットで感想をつぶやいたりすることもあるかもしれません。美術館に設置してある来館者アンケートにも、さまざまな意見が書かれていて、私たちも常々参考にしています。

今回の展覧会「つぶやき おはなし ものがたり」では、企画する側が作品についてのお話を語るのではなく、見る人がそれぞれ抱く、さまざまな気持ちや感想、感情、あるいは見る人自身で気がついたことを、主役にしてみようと考えました。それらもまた、作品が生み出したお話であるはずだからです。作品を目にして、自然に生まれたイメージとしての「お話」やお話未満の「つぶやき」を自分の中に留めておくのではなく、積極的に外に出すこともまた、展覧会をめぐって生み出される「ものがたり」の一つのかたちではないか、というわけです。

そのきっかけとなったのは、当館の浜田副館長から聞いたエピソードです。展覧会の出発点とした中西夏之の《コンパクト・オブジェ（卵）》は、樹脂の中に靴や時計、コイン、電話のダイヤルなど、古くて壊れたものがたくさん閉じ込められている作品です。2003（平成15）年の展覧会でこの作品が出品されているのを見た当時の小学生が、何年か後、大学生になってから、「あのタイムカプセルの作品は何という作品ですか？」と尋ねたというのです。《コンパクト・オブジェ》が与えた強い印象は、タイトルのどこにも書いていない「タイムカプセル」という新たなイメージとなってその子の中に残り続けたということに、浜田副館長は衝撃を受けたと言います。そこで今回は《コンパクト・オブジェ》をタイムカプセルに見立て、その中に入っている物をひとつずつ取り出すようにして、展示を構成しました。

展示室を入って最初に見る《コンパクト・オブジェ（卵）》にみんな興味津々です

三つ折りにすると、作品カードをコラージュした部分が、たまご形にくり抜いた枠から見えるように工夫

展示構成は中に入っているものを種類ごとに分類して、「だれかのもちもの？」「きかいのいちぶ？」「ペットの思い出？」「どうしてたまごのかたち？」「集めたらすごい！」という５つのコーナーに分けました。それぞれのコーナーから、一つ、あるいは二つの作品を選んで、元々のたまごの中に入っていた物語としてイメージしてみようと考えたのです。

そういったコンセプトを、どうしたらもっとわかりやすく伝えられるかは、また別の問題です。「なつやすみの美術館」展シリーズはすでに５年目となりましたが、この３年は、主に小中高の学校教員と教育普及課の学芸員が定期的に集まる「和歌山美術館教育研究会」で、展覧会ワークシートを作成しています。今年も春から、どういったワークシートを作ろうかと、研究会で議論を重ねてきました。

人が集まるというのは面白いもので、うまいトスが上がると、次々にラリーが続いてゆきます。今回は全展示作品のカードを作って貼り込み、横に生徒たちがお話を書くスペースを作ろうかというアイデアから、カードをコラージュにしてはどうだろうか、さらにはそこにたまご形にくり抜いた枠を重ねると、まるで《コンパクト・オブジェ》のように見えるのではないか、という意見が一気に出てきました。《コンパクト・オブジェ》から取り出したモチーフに、自らのお話を重ね、もう一度たまご形のなかに閉じ込めるという一連の作業は、展覧会のコンセプトを目に見えるかたちにするものとなりました。

展示室の最後に設けた「ワークスペース」のコーナー

そういうわけで、今回のワークシートは、鉛筆で文字を書き込むだけでなく、鑑賞と制作が合体したものとなりました。そのため作業場所が必要となり、作品保護のために展示室の一角を仕切り、使える道具を限定し、その配置にも配慮するなど工夫しました。毎回こういった展示室を作るのは作品保護の観点からも簡単には出来ませんが、今回の展覧会では、このワークシートを使った作業が展示内容と切り離せないこともあり、実験として行いました。結果的に、これまでにない展覧会と鑑賞のかたちを、考えることができました。

たった一つの作品をめぐって、これほどまでにたくさんの要素を取り出し、普段なら決して横に並びそうもない作品たちを一度に展示することになった今回の展覧会。《コンパクト・オブジェ》を「タイムカプセル」と呼んだという生徒の話を、担当者が副館長から聞いたことから始まりました。来館者の自由な物語を引き出すという主題の裏側に、その生徒と副館長のひみつの物語を、こっそり隠しておきました。　（青木加苗）

副館長のミュージアムトーク

今回の展覧会で「副館長のミュージアムトーク」を担当しました。7月25日と8月2日、計2回のミュージアムトークでお話ししたことや、来館者の興味深い言葉、そして私自身の「つぶやき おはなし ものがたり」も織り交ぜながら記します。

《コンパクト・オブジェ（卵）》

「つぶやき　おはなし　ものがたり」展の冒頭に展示されたのは中西夏之の《コンパクト・オブジェ（卵）》です。当館が現在地に新築移転してから21年経ちますが、この作品は計14回も出品されています。単純に計算すると1年半に1回。私が担当した「サマー・ミュージアム―わかやま発見―」（2009年）にも出品しました。

この作品を見ると、何が入っているのか思わず覗き込みたくなります。電話のダイヤルや靴など、はっきりとわかるものも入っていますが、どう目を凝らしても正体がわからないものもあります。子どもたちだけでなく大人をも惹きつける作品です。展覧会は、その中のものを取り出して分類し、持ち主やその人の思い出について探るように展開されました。

「だれかのもちもの？：これはくつ？」浜地清松《暖炉》

最初に設けられたのは靴のコーナーです。これは様々なものの中でも、誰かが身につけていたはずのものというグループに入るものです。1万2千点あまりの所蔵品のなかから選ばれた靴たち（計7点の作品）ですが、制作年順に並べた最初の3点は浜地清松、野田英夫、ヘンリー杉本というすべて移民作家の作品となりました。

図1 浜地清松《暖炉》1911（明治44）

《暖炉》の作者、浜地清松は1885（明治18）年、和歌山県東牟婁郡古座町津荷（現在の串本町）に生まれました。明治の末に兄を頼って移民として渡米、アメリカで美術を学び、そしてパリを経て帰国し活躍した画家として知られています。アメリカでの作家活動を確認できる作品は数少ないので、貴重なものです（図1）。2005（平成17）年に「なつやすみ和歌山美術探偵団展」が開催された際にも展示されましたが、ちょうどその年の3月に、かつてこの油彩画が飾られていた津荷小学校が閉校し、それを機に当館に寄贈されることになりました。暖炉のなかで薪がパチパチとはぜる音に聞き入っているのでしょうか、仲良く座っている二人の靴にはかわいらしいリボンがあしらわれています。

「だれかのもちもの？：これはかがみ？」舩井裕《TRAP》

《コンパクト・オブジェ（卵）》に入っている丸い鏡は、どうやらバイクのバックミラーのようですが、ここでは色々な鏡の作品が並びました。しかし「鏡」を普通に描いている所蔵作品は当館には少なかったのか、何点か「鏡といえないこともない」作品も展示されることになりました。《TRAP》はそのひとつでしょう（図2）。

私は1988（昭和63）年に「関西の美術家シリーズ5　版画の4人―井田照一・木村光祐・黒崎彰・舩井裕」を担当しましたが、これはその出品作でした。作品を借用するため、舩井氏が当時勤めておられた大阪芸術大学の研究室に伺いました。その折りに展覧会ポスターも持参したのですが、デザインがお気に召さなかったようで、がっかりした記憶があります。それだけではありません。展覧会オープン後、「舩井裕は円筒形をモチーフとした作品を描き続けてきた」と新聞記事に書いたら、舩井氏から「私にとって円筒形はモチーフではなく、主題です」というご指摘をいただきました。〈円筒形というモチーフ（構成要素）で、円筒形とは何か別の「主題」を表す〉のではない、自分は円筒形そのものを主題としているのだ、ということです。構成要素と主題、

図2 舩井裕《TRAP》1968（昭和43）

音符と楽曲を取り違えるというのは、学芸員としてはきわめて初歩的な間違いであり、再び落胆しました。この《TRAP》の中のひしゃげた円筒を見るたびに当時のひしゃげた気持ちを思い出します。

「きかいのいちぶ？」安東菜々《Electric Wire》

《コンパクト・オブジェ（卵）》の中の釘やネジといった部品や電話のダイヤルをひとまとめにすると、機械にまつわるものと捉えられます。安東菜々のシルクスクリーン作品《Electric Wire 7》（電線）も、機械や電話とつながる要素であるとして出品されました（図3）。光を奇妙に屈折させたり、ブレさせたりしてしまう、そんなガラス越しに見ているかような電線や碍子（がいし）、生い茂った雑草、そして空。曖昧模糊とした風景には人生や宇宙の不確かさが重ねられているのでしょうか。

8月2日のミュージアムトークでは20名

図3 安東菜々《Electric Wire 7》1977（昭和52）

近くの方が話を聞いてくださったのですが、私が「でも空を見上げて電線や碍子に目を向けるって、やはり作家は目のつけどころが違いますよね」と語りかけたところ、目の前のお客さんが「えっと、私も毎日空を見上げて電線の写真を撮ってますけど」とおっしゃり、びっくりしました。鉄塔のファンが多いことは知っていましたが、電線単独のファンがいらっしゃるとは。

「ペットの思い出？」
織田一磨の犬《東京風景 20 神楽坂》

赤い首輪のようなものが入っていたことから、犬や猫の登場する作品を集めたコーナーが設けられました。その中でも織田一磨の代表作『東京風景』（全20点）を見る度に「同じ風景を描いてもどうして人によってこうも違いがでてくるのだろう」と思います。近代化によって急速に変化していった東京の風景を描いた版画家はじつに多いのですが、この『東京風景』はそのなかでも傑出しています。リトグラフの並外れた技量がそれを支えていることはもちろんですが、なによりそこには、失われゆく江戸情緒と人々の生活に寄せる深い情愛など、じつに細やかな観察力を感じます。しかし良く見てみると織田が観察していたのは建物や人々だけではなかったようです。神楽坂風景の中央あたりに描かれている犬がどのような仕草をしているか、ミュージアムトークの前にじっくり見てみました（図4）。飼い犬なのか、それとも野良犬か、お腹をすかしているだろうか、などといろいろ考えていて、ふと目線を左に移したら、たたずんでいる二匹目の犬を発見しました（図5）。首を長くしているようなシルエットです。暖簾の奥から流れてくる美味しそうな匂いにたまらず、吠えているのでしょうか。この発見で得意になった私は、二回目のトークのときに「じつは二匹目の犬が描かれているのです。さあどこでしょう？」と問いかけました。みなさん、そう簡単には気づかないだろうと推測してのことです。ところが1秒も間を置かず、2メートルほども離れたところから或る方が「そこにいますね」と言って指をさされ、そのあまりの速さにびっくりしました。

図6 荒木高子《無精卵》1975（昭和50）

「どうしてたまごのかたち？」
荒木高子《無精卵》

一歩引いて《コンパクト・オブジェ》の全体に目を向けると、それがたまご形であることが不思議に思えてきます。たまごそのものや、たまごの形が登場する作品も数多く並びました。

そのうちの一つ、荒木高子氏の作品の近くに立っていると、「気味が悪い」という子どもたちのつぶやきを聞くことが何度かありました（図6）。

当館が最初に荒木高子のアトリエ調査をおこなったのは1988（昭和63）年、兵庫県の六甲においてでした。翌年の「関西の美術家シリーズ6　現代の造形　土と布と糸。荒木高子・前川強・濱谷明夫展」の準備のためです。アトリエの陶芸作品を次々に記録撮影しているとき、荒木氏は「この作品を作った頃、創作をめぐる或る悩みからスランプに陥り、良いアイデアが全く浮かばなくなった。だからこの作品には無精卵と名付けた。」という主旨の話をしてくださいました。そういうオーラが展示室内の作品から出ていたのだとすれば、「気味が悪い」というつぶやきはもっともなことです。

図7 畦地梅太郎《谷間の声》1966（昭和41）

「どうしてたまごのかたち？」
畦地梅太郎《谷間の声》

山の風景を題材とした木版画作品で知られる畦地梅太郎。1950年代からユニークな山男も登場します。この作品は《谷間の声》と題がつけられているので、一体誰の声だろうと以前からずっと気になっていました（図7）。逆三角形の顔をした生き物たちは、たまご形の中にいますし、たまごのようなものも上部には見えます。不思議な彼らの「声」、そして大の字になって寝ているように見える人物の謎。作家自身の言葉を調べてみると、この作品が「山でのあぶなっかしい行動」から生まれているということまではわかりました。そうすると、この横たわっている人物は呑気に昼寝をしているわけではなく、遭難など何か危ない目にあっているということになるのでしょうか。

ところで第1回目のミュージアムトークで参加者の方がこう語ってくれました。「私の弟が高校時代、美術の選択式のテストを受けたとき、美術家の名前を記入せよという設問がいくつもあって、よくわからないものだから全部「畦地梅

図4 織田一磨《東京風景 20 神楽坂》1917（大正6）

図5 左下アップ

太郎」で埋めたそうです。帰宅して話していたら母から、そんなときはもっと有名な人の名前を書くものよと注意されていました」と。

第２回目のミュージアムトークでは、「畦地梅太郎のファンなのですが、まさかこの展覧会で作品と出会えるとは思わなかったのでうれしいです。山登りの好きな友人から以前畦地さんのことを教えてもらいました。」と話してくださった参加者の方がいました。畦地梅太郎の人気を改めて感じました。

ミュージアムトークで私が一方的に話をしたならそれは「つぶやき　おはなし　ものがたり」展の趣旨に大いに反するわけですが、幸い参加者のみなさんは、このニュースでは一部しか引用できませんでしたが興味深い話をたくさんしてくださいました。みなさんどうもありがとうございました。　（浜田拓志）

「なつやすみの美術館」展の教育普及事業いろいろ。

「なつやすみの美術館」シリーズでは、さまざまな教育普及事業が定番となってきました。一つは、冒頭の記事にも記した、学校教員とのワークシート製作です。それに加えて、「こどもギャラリートーク」や和歌山大学学生による「たまごせんせいとわくわくアートツアー」も定着してきました。前の記事にもある通り、今回は通常のギャラリートークも、「副館長のミュージアムトーク」と題して、特別に実施しました。NPO 法人和歌山芸術文化支援協会（wacss：ワーカス）が主体となり、展覧会に関連させて企画するワークショップも忘れてはなりません。ここでは、「たまごせんせいとわくわくアートツアー」と図書館との二本立てで実施したワークショップについてご報告します。

展覧会事業から、サークル活動へ

「たまごせんせいとわくわくアートツアー」は 2013 年の「美術の時間」展から始まった事業です。和歌山大学の学生たちが、来館者と一緒に作品について話をしながら、展覧会を見るという取り組みです。当初は和歌山大学の授業の一貫でしたが、昨年は絵画部を中心とした有志で集まったメンバーで実施しました。ここ数号の NEWS でも記してきましたが、昨年秋からはその活動が広がり、新メンバーも加わって、「美術館部」として動き出していました。今年の展覧会をもって１年の活動を経たということもあり、正式にサークル登録を行うことができ、この 10 月から正式な大学のサークルとして発足しています。学業との両立はなかなか難しく、どうしてもまとまった活動は「なつやすみの美術館」展での「たまごせんせい」が中心とはなりますが、それ以外の時期にも、当館での活動の場を自ら広げていってくれることと期待しています。

館を飛び出たワークショップ

wacss と共同で実施している夏休みのワークショップは、これまでは美術館で行ってきました。今年は、「なつやすみものがたり」と題し、京都とスペインで活躍されている美術家、新井厚子さんを招いて、図書館と美術館の２カ所で、対比的なワークショップを実施しました。

図書館編では、本を順番に回し、ページ番号や何行目かなどを手がかりに偶然拾い上げた言葉をもとに、それを絵にしてゆくというアプローチです。一方、美術館では、展示されている作品から、言葉を想像し、絵文字や自由なかたち、さらにはお話を考えて書くという方法を採りました。両ワークショップとも、同じサイズの画用紙を用い、最後に本のように折り畳むことで、思いがけないトリミングがなされることを狙いました。両方のワークショップに参加できた子どもは少なかったのですが、絵と言葉、かたちとしての文字をめぐって、双方向的なアプローチを行えたことは収穫でした。

さて、展覧会自体は本来一つの教育活動とはいえ、より直接的に来館者に関わりを持つ教育普及事業が、近年求められています。しかし「なつやすみの美術館」でさまざまな事業を実施していると、求められるから行うのではなく、そういった関連事業が、一つの展覧会を支えてゆくことにもなるのではないかと感じています。展覧会の軸は企画担当の学芸員が作るのが基本ですが、さまざまな人が続けて関われる展覧会は、周りを見てもそうそうありません。たとえその年の会期が終わっても、「次はどんなことをしようか」「来年はもっとこうしたい」と考える人が増えてゆくことを、「なつやすみの美術館」展では目指したいと思います。

（青木加苗）

戦後70年の絵画 ――― ちょっと映画にも出演

美術館は、企画内容や作品の状態も鑑みてのことですが、所蔵品を互いの展覧会に貸し出すことがあります。作品をより多くの方に見ていただくことによって、作品研究が広く深くなる機会にもなります。

今年は第二次世界大戦後70年という節目で、この時代を振り返る展覧会が多くあり、当館からもいくつかの作品が出品されました。日中戦争から始まった先の大戦は、画家たちにとっても大きな転機となり、とくに戦争画を描いた画家は、戦後、戦争責任を問われるなど厳しい時期を経験しています。彼らが描いた戦争画についても、一面的な見方がされてきましたが、70年という時間が、踏み込んだ多様な評価を可能にしつつあります。

今年、いつもより多く出番があったのは、高井貞二の作品です。展覧会だけでなく、この11月に公開される小栗康平監督、オダギリジョー主演の『FOUJITA』にも、展覧会「決戦美術展」の場面で高井の《北の兵士》がちょっとだけ登場します。藤田嗣治は、エコールド・パリで活躍した画家ですが、戦時中はこのシーンにも登場する《アッツ島玉砕》などの作戦記録画を描き、戦後、フランスに渡って生涯を終えました。

一方、高井貞二は、大阪で生まれ、和歌山で育った画家です。1930（昭和5）年、19歳の若さで二科展に入選し、東郷青児などとの交流を通して、モダンな画風を展開させました。当時流行の雑誌『新青年』などを舞台に挿絵や装丁のジャンルでも活躍し、戦後は藤田の勧めでアメリカに渡って刺激的な現代美術の潮流に触発されながら、自身の制作を進めていきました。

当館でも昭和初期のモダンな作風に人気があり、秋のコレクション展でも《想ひを》を展示していますが、それと一緒に《エミグラントの街》1940（昭和15）年、《北の兵士》1943（昭和42）年も今回は並べています。比べてみると随分雰囲気が違うと感じられるのではないでしょうか。《想ひを》の都会的でクールな、そして幻想的なイメージから、巧みな写実で描かれた雪原に伏せて銃を構える兵士たちの群像の間には大きな飛躍があります。

《想ひを》が描かれた翌年は「二・二六事件」が起こった年ですが、このころから美術にも、誰にでもわかりやすい表現で、国の政策を普及する役割が求められるようになりました。高井が得意とし、「メカニズム」とよばれていたモダンな画風は展覧会でも受け入れられにくくなり、画家として生きる道を模索した痕が、《エミグラントの街》に見られます。写実的な描写は、ハルビンでの取材で撮影してきた写真によるもので、さまざまなイメージをモンタージュするように、一枚のキャンバスに組み合わせています。日中戦争が始まって以来、人々の関心事であった中国大陸の風物を、モダンな方法で表現するこのモンタージュは、斬新な視覚効果をもたらす近代的な手法でした。印刷物などの実物を画面に貼るコラージュもありますが、高井は手前の地図まで、綿密に自分の手で描きこんでいます。

高井貞二
1930
（昭和5）年

高井は1938（昭和13）年に結成された陸軍美術協会の一員として中国大陸に渡ります。そしてその折りの取材による『中支風土記』を出版し、二科展に《支那の市場》を出品した翌年、ハルビンを訪れました。《北の兵士》は、1942（昭和17）年に、当時、中国大陸に駐留していた関東軍の報道演習に参加し、中国国境付近を旅したときの取材によるものです。1935（昭和10）年制作の《想ひを》からわずか数年で、これほど画風が変化した理由を、時代背景から考えていただければと思います。

（植野比佐見）

「コレクション展　2015-秋」より　右から《想ひを》《エミグラントの街》《北の兵士》

映画『FOUJITA』より　ⓒ『FOUJITA』制作委員会

《北の兵士》
1943（昭和18）年
油彩、キャンバス

くりかえしの美、南野馨さんワークショップ

南野さんの作品の前で自分たちの作品を持って記念撮影

くりかえしという言葉から、みなさんはどんな作品を想像されるでしょうか。

「特集　くりかえしの美」では、作品を成り立たせる要素としてのくりかえしに焦点を当て、主として造形的な視点から作品を理解していくことを試みました。展覧会は、4つのコーナーで構成し、作品の中のくりかえしについて探りました。

一つ目は「形のくりかえし」。作品の中に同じ形がくりかえされて並んでいる表現を紹介しました。冒頭に展示したのはアンディ・ゴールズワージーの《光をとらえるように折り曲げられた葉》。折り目をつけられたたくさんの葉っぱが竹の小枝で地面に刺されています。同じ形の葉っぱと、それを折って広げ、地面にとめていくという作業のくりかえしから生まれた作品であることが見て取れます。

次が「くりかえしのルール」。単に同じ形が並ぶだけでなく、左右対称、点対称、面対称といった規則に従ってくりかえされることによって生まれる形の面白さを見ていきました。

そして「くりかえして一つになる」。同じ形のくりかえしが、円や四角形、あるいは立方体や球になっている作品を紹介しました。

ある形が何らかの意味を担っているとするなら、それがくりかえされるということは意味がくりかえされると言うことではないか。最後のコーナーではそのような視点から「意味のくりかえし」を探りました。くりかえされることによって、作品の中では意味が強調されることになります。例えば高松次郎の《英語の単語》は、「THESE」「THREE」「WORDS」という三つの英単語をコピーしただけの簡潔な作品ですが、形ではなく言葉がこの作品そのものを意味するかのように現れており、作品自体がその作品を説明する言葉となっているようで、まさに意味のくりかえしを作品として成り立たせています。

更に、今回の展示では取り上げることができませんでしたが、同じ主題が一人、あるいは複数の作家によって歴史の中でくりかえし取り上げられるといったことも考えられるでしょう。

さて、そのような展覧会に関連して、出品作家によるワークショップを実施しました。*

ご指導いただいたのは、「くりかえして一つになる」のコーナーに特別に出品いただいた南野馨さんです。

南野さんは、陶による巨大な作品を多く制作されていますが、その作品は型を用いて同じ形の部品をたくさん作り、組み立てて一つの大きな立体にするという手法を使ったものです。出品いただいた《untitled 1402》は、正二十面体が基本となっており、それが三層に重なって一つの球体を形づくっています。

南野さんの作品の作り方を体験することを通して、作品について理解してもらうことを目指しましたが、土を使った作品は成形から乾燥、焼成という工程が必要で、そのまま体験するのも難しそうでした。

そこで、普通の粘土ではなく、オーブンで焼けるという特殊な素材を使うことにしました。色も三色使うことができ、シンプルな形に変化を持たせることができる材料です。

南野さんに準備いただいた型に粘土を詰め込んで、20個の三角形を作り、それらを組み立てて球にしていきます。単純な作業ではありますが、同じものを20個作るのは小学生にはなかなか根気も体力も必要な仕事です。さらに20個の外殻をつなげて球にしていくのは、特に低学年には難しいと思われましたが、参加してくれた皆さんはものすごい集中力を見せて全員が球体を完成させただけでなく、穴を開ける作業によってオリジナリティーある形を完成させることができました。

このワークショップでは、展示されている南野さんの作品と同じ形を生み出す体験を通して、土という素材を使って形を基礎づける原理に触れることができたのではないでしょうか。　　（奥村泰彦）

＊ 夏休みアート・ワークショップ
～おもしろい形　みつけよう・つくろう～
8月22日（土）／主催：和歌山県・一般財団法人 和歌山県文化振興財団／企画・運営協力：NPO法人 和歌山芸術文化支援協会（wacss）

スタンプラリー続く

ご来館のたびに、展示室入口でスタンプを集めるとプレゼントがあります、というお話、いたしましたか？
今年の４月から来年の３月まで、全ての企画展と特集展示について一つずつ、それぞれ異なったデザインのスタンプを準備しています。もう５つぐらいスタンプを集めた方もいらっしゃるかもしれません。スタンプ５つ目のプレゼントはスタンプを元にしたかっこいい館バッジでした。
このスタンプラリーですが、実はいつも受付にいるスタッフたちが消しゴムを彫って手作りしています。なかなかの精度なので、みなさまにもご覧いただきたいと思ってご紹介します。プレゼントの企画やデザインも同じスタッフがやっています。
続く展覧会スタンプは、開催中の「特集展示 逸見享（9/19-12/6）」、そしてその先の「生誕110年 村井正誠（12/18-2/14）」、「特集展示 光について（12/23-3/13）」、「宇佐美圭司回顧展（3/1-）」です。7つ目のプレゼントはオリジナル

手ぬぐい、手作りです。
お越しくださるおひとりおひとりのお客様に喜んでいただける方法を、みんなで考えています。ご来館をお待ちしています。（植野比佐見）

Museum Calendar

開館／９時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

生誕110年　**村井正誠展**　ひとの居る場所

12.18（金）―2016.2.14（日）

和歌山県新宮市で育った画家、村井正誠（むらい・まさなり、1905～1999）。ひとが時代と場所を越えて繋がりあえる絵画を求めて、描き続けた生涯を回顧する展覧会です。

村井正誠
《クリジィ》
1947（昭和22）

宇佐美圭司回顧展

2016.3.1（火）―4.17（日）

和歌山市で少年時代を過ごした宇佐美圭司（うさみ・けいじ、1940～2012）は、人体を記号化した絵画で注目を集めました。没後３年を機に、アトリエに残された遺作を中心に、その画業を一望します。

第69回和歌山県美術展覧会

Ⅰ　11.19（木）―11.23（月）
Ⅱ　11.25（水）―11.29（日）
Ⅲ　12. 2（水）―12. 6（日）

9.19（土）―12.6（日）
コレクション展 2015―秋
特集 生誕120年　**逸見享**
特集 アメリカ移民の歴史と芸術家たち

逸見享
《幸福な海女の群》
1919（大正８）

12.23（水・祝）―2016.3.13（日）
コレクション展 2015/2016―冬
特集 **光について**

2016.3.29（火）―６月中旬（予定）
コレクション展 2016―春
特集 **謄写印刷工房から** ―印刷と美術のはざまで

平成２７年度友の会ミニ鑑賞ツアー

田並劇場で林憲明氏にお話を伺う

友の会一行は、6月28日（日）大型バス一台で、本州最南端の串本に向かいました。無量寺では串本応挙芦雪館を見学、天候にも恵まれたので収蔵庫にて長沢蘆雪の龍虎図も鑑賞しました。串本ロイヤルホテルで昼食をとり、串本在住の友の会会員の方の案内で大島のトルコ記念館・樫野崎灯台を見学し、その後、古い劇場跡を改修した「田並劇場」に立ち寄り、現代美術家・林憲昭氏が文化に触れる場所として立ち上げた再生プロジェクトに寄せてきた想いについて話を伺いました。とても充実した楽しいツアーとなりました。（参加者50名）

平成２７年度バックヤードツアー

8月29日（土）、午後1時30分から約1時間半、浜田副館長によるバックヤードツアーを開催しました。まず、2階ホールで黒川紀章設計による建築のスライドレクチャー、その後、1階、2階と裏方を探索しました。参加者は、建築のこだわりや建物の中の動線、学芸関係フロアー、和歌山城を望むテラスなどが特に印象に残ったようでした。途中のお茶休憩時の会話も含め、貴重な経験ができて、とても良かったとの感想でした。（参加者20名）

作品用の大型エレベーターにも乗りました

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

TO THE MUSEUM

友の会 入会のご案内

一般会員 6,000円　学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。
詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：松原

友の会 特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧（同伴者１名まで）
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
6. 版画の頒布会への参加

和歌山県立近代美術館ニュース　No.84
編集発行／和歌山県立近代美術館　〒640-8137　和歌山市吹上 1-4-14
Tel.073-436-8690　Fax.073-436-1337　http://www.momaw.jp/
発 行 日／2015年11月29日　デザイン／鶴田デザイン事務所　印刷／阪口印刷所

和歌山県立近代美術館